

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：11501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25660185

研究課題名(和文) コモンズ利用とネットワーク変容の相互関係に関する比較歴史制度分析

研究課題名(英文) Historical, comparative, and institutional analysis of relationships between use of commons and social networks

研究代表者

林 雅秀 (HAYASHI, Masahide)

山形大学・農学部・准教授

研究者番号：30353816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に歴史資料調査に基づいて、コモンズに関わるフォーマルな制度のほかや、人々の行動を実際に規定している慣習や人間関係・社会関係といったインフォーマルな制度と、コモンズ利用のパフォーマンスとの関係を明らかにすることを目的とした。明治後期の岩手県内の100件以上のコモンズを対象としたデータ分析では、村々入会と一村入会による入会管理の特徴を整理し、一村入会よりも村々入会において資源不足がより多く発生する傾向があることや、村々入会において何らかの制限(あるいは制度)が設けられる傾向があることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate relationships between the performance of management of commons and informal institutions such as social relationships by users' groups, as well as formal institutions for the commons. With the use of data from commons more than 100 in Iwate prefecture, we have shown following characteristics. First, resource shortages are happen more frequently in multiple group commons than in single group commons. Second, more restrictions are established in multiple group commons than in single group commons.

研究分野：林業社会学

キーワード：コモンズ 歴史 比較分析

1. 研究開始当初の背景

かつて、採草利用や薪炭利用、のちに木材供給源として盛んに利用された共有林は、木材価格の低下と地域社会の過疎化・高齢化に伴って放置されるに至るなど、マクロな経済条件の長期的変化とともに変化してきた。それとともに、山村地域で過疎化が進行するなど、経済活動や社会・組織も大きく変化した。本研究では限界集落化しつつある地域における共有林の長期に渡る持続的利用を可能にする集団や組織の構造の解明を図る必要があるものと考えた。

2. 研究の目的

主に歴史資料調査に基づいて、コモンズに関わる明文化された法律・ルールや自治組織機構などのフォーマルな制度だけでなく、人々の行動を実際に規定している慣習や人間関係・社会関係といったインフォーマルな制度を明らかにする。これによって、フォーマル・インフォーマルな制度と資源利用の持続性・非持続性などの利用パフォーマンスの間の因果関係を明らかにする。

3. 研究の方法

主に福島県内ならびに岩手県内のコモンズに関する歴史資料調査を実施し、コモンズに関わる明文化された法律・ルールや自治組織機構などのフォーマルな制度等が記載された資料を収集する。そのうえで、百件以上のコモンズについてのデータセットを作成する。作成したデータを用いて、コモンズ利用のパフォーマンスとフォーマル・インフォーマルな制度との間の因果関係を、統計的な手法を用いて明らかにする。

4. 研究成果

【2013年度の成果】

2013年度にはまず、既存の先行研究ならびに担当者らがこれまで実施してきた先行の研究課題のなかで行ってきた予備的な調査を利用して、本研究課題の研究枠組みの再検討を行った。その結果、研究目的に接近するための手段として、共有林野の利用・管理のパフォーマンスと、利用・管理する集団内または集団間の社会構造や慣習といった制度との連関を時系列の変化を追うことによって明らかにすること、その際、両者の関係をダイナミックな因果関係として把握することが有効であると考えた。

福島県内の共有林を対象とした調査では、2箇所の集落において、地元の区長らが保有している資料の収集とインタビュー調査を行った。資料とは具体的には、過去数十年に渡る区の役員会や総会の議事録や会計資料、共有林の管理団体の役員会の議事録や会計資料などである。資料収集は地元の公民館等の部屋を借りて写真撮影によって行っているところである。予備的に資料の解読・分析を進めたところ、主として1960年頃から1990

年頃にかけての共有林の利用形態とその変化、集落が行ってきた利用のための意思決定の変遷を把握できることが分かってきた。

また、岩手県内の共有林を対象とした調査では、複数の入会林野における主に大正から昭和初期にかけての利用形態とそのための規制やルールについて記載された資料収集を進めた。対象の集団について、この時期の集団内の社会構造を表す資料を収集することは難しいと分かったため、次善の策として明治期からの旧市町村レベルで社会構造を表す資料で代替することが合理的であると判断した。

【2014年度の成果】

本研究課題に関連して採択された日本学術振興会の外国人研究者招へい事業(林野コモンズの大規模比較研究に向けた方法の確立・M. McKean 教授(米国 Duke 大学))を実施し、McKean 教授を約2か月間に渡って森林総合研究所東北支所に招へいした。招へい期間中は共同研究者らとともに研究会とディスカッションを頻繁に開催し、大規模比較研究によって本研究を展開するための方法を学んだ。招へいを通して得た成果の一部は公開研究会「林野コモンズの大規模比較研究に向けて」において発表し、この分野の研究者と意見交換した。

この招へい事業とも関連して、次の研究会を開催した。

2014年6月16日(月) ラージN研究会 13:00~18:00

場所: 森林総合研究所東北支所ブナ帯棟(岩手県盛岡市)

プログラム:

- 1) 紫波郡赤沢村の事例ほか(報告者: 泉桂子(岩手県立大))
- 2) 西磐井郡金沢村および九戸郡伊保内村の事例(報告者: 早坂啓造(元岩手大))
- 3) 稗貫郡湯本村の事例ほか(報告者: 中村良則(富士大))
- 4) 岩手郡中野村と部落有林野統一関係資料の分析(報告者: 林雅秀(森林総研東北))
- 5) 官庁統計による分析(吉良洋輔(日本学術振興会))

6月16日の研究会は、研究プロジェクトへの参加を希望する共同研究者ならびに招へい研究者である McKean 教授による、岩手県の部落有林野統一関係資料の内容の理解を深める目的で開催した。今回の招へい期間開始前より、有志の共同研究者で分担して同資料の内容読解・分析を進めていたため、各自が担当した内容を報告しあった。研究会を通して、大規模比較研究にとって望ましい多様な事例が存在することや、事例によっては、少数事例の比較研究が望ましい、入会利用についての詳細な情報が含まれる場合もあることなどが明らかにされた。

少なくともこれまでの世界中のコモンズ論分野において、歴史的資料を用いた大規模

比較研究は行われていないため、本研究プロジェクトが本当に遂行可能かどうか未知数の部分が多い。しかし、元資料を質的によく理解することを通して、大規模比較研究においても実質的な意味のある分析が可能になるはずである。

なお、資料の内容に関心があるものの遠方であるため研究会に参加できない者もいたため、研究会は Skype を利用して遠方の参加も可能にした。

2014年7月23日(水) 研究会「林野コモンズの大規模比較研究に向けて」

13:30~18:00

場所：東京大学弥生キャンパス フードサイエンス棟

プログラム：

1) Research design and research questions (Margaret A. McKean (Duke 大))

2) 岩手県の入会関係資料全体像と部落有林野統一資料の詳細 (早坂啓造 (元岩手大))

3) 部落有林野統一資料による大規模比較研究に向けた課題整理 (林雅秀 (森林総研東北))

4) 昭和後期におけるコモンズ管理の実態：『昭和49年全国山林原野入会慣行調査』の大規模比較分析 (金澤悠介 (岩手県立大))

5) Well documented commons: Japan and Europe (Margaret A. McKean (Duke 大))

6) 討論 (議題整理と全体討論)

司会：三俣学 (兵庫県立大)・齋藤暖生 (東京大)

7月23日の東京での研究会は、招へいプロジェクトの中で進めてきた共同研究の概要に関する中間的報告を行い、広く研究者の意見を聞く目的で開催した。参加者数は35名ほどだった。最初に Margaret McKean 氏が、この研究プロジェクトのリサーチ・クエスチョンを見つけることが重要なのでぜひフロアから意見がほしいという旨の研究会の開催目的を説明した。早坂啓造氏は、これまでに岩手県内を中心とした入会関係の歴史的資料を収集してきている「小繋事件文庫」の全体像を紹介した上で、その一部である岩手県庁文書、ならびに、さらにその一部である部落有林野統一関係資料の全体像について説明した。林雅秀は、部落有林野統一関係資料のなかの明治44年公私地入会関係調査表データを用いた試行的な大規模比較分析の方法と結果を説明した。金澤悠介氏は、昭和49年全国山林原野入会慣行調査データを用いた大規模比較研究の結果、この時期の入会林野利用を4つに類型化できることを明らかにした。最後に、Margaret McKean 氏が、ヨーロッパ諸国において近代化の過程でコモンズが減少してきた過程についての比較的分析について説明した。これにより、日本の入会林野が減少してきた過程を相対化して捉えるうえで重要な視点を示した。討論は三俣学氏および齋藤暖生氏を司会として進

行され、ラージN研究とスモールN研究の強みと弱みや、村中入会か村々入会かといった所有形態の相違が対応の相違に与えた影響といった論点に関して、活発な議論が行われた。

2014年度の岩手県内の共有林を対象とした研究では、上記の大規模比較研究の進展と関わって、明治末から昭和初期における部落有林野統一事業ならびに入会地整理事業に関わる資料収集と試行的なデータ入力を進めた。この時代の社会構造を示す資料を入手することは困難だったため、次善の策として農地改革前の農地所有構造を表すデータを入手した。試行的データを用いて、1つの資源を管理する入会集団が単一集団か複数集団に注目して試行的データ分析を行った結果、単一集団よりも複数集団において何らかの「制限」、すなわち資源を管理するためのルールが形成されていることなどが分かった。このことからコモンズを管理する集団の社会構造が利用についてのルールに及ぼす影響が大きいことが推察される。今後、データ入力および分析を精緻化し、試行的分析によって明らかになりつつある諸点の頑健性を検証する必要がある。

【2015年度の成果】

2015年には5月にエドモントン(カナダ、アルバータ州)で開催された国際コモンズ学会において、「Combining Documentary Archives with Survey Data to Advance from Case Studies to Large-N Analysis of the Japanese Commons」と題し、Margaret McKean氏をコーディネイターとするパネル報告を行った。各報告の「タイトル」(報告者)は報告順に次の通りである。

(1) 「小繋事件文庫：20世紀岩手県におけるコモンズの法廷論争から大規模比較研究へ」(早坂啓造)

(2) 「20世紀初期の日本のコモンズにおける資源不足の原因と結果」(林雅秀)

(3) 「日本の林野所有の変化が及ぼした影響：19世紀後半から20世紀初頭の都道府県データによるパネル分析」(吉良洋輔)

(4) 「高度成長期におけるコモンズ管理：大規模比較研究」(金澤悠介)

本パネルの問題意識は、日本には国際的にみても林野コモンズについての歴史的記録が膨大に残されており、そうした記録を用いたコモンズ研究あるいは集合行為研究を行うことが必要ではないかという点にある。さらにこうした問題意識の背景には、すでに古典ともいえる Ostrom (1990) やその後の数多くのコモンズ研究 (Poteete et al. 2010) のなかで、統計的な意味で多数のコモンズを同時に分析対象にするラージN研究を志向する研究が増えてきているものの、歴史的な記録を用いたラージN研究はほとんど行われていないという研究の現状に対する挑戦という

意味合いがある。さらに言えば、本パネルにおいてそれに成功したか否かはさておき、集合行為やその成否を決めると考えられている社会的状況の変化についてのラージN研究によって、集合行為の因果の解明に近づこうとする意図がある。つまり、集合行為とその因果の変化を研究する際、歴史的記録に依拠するという研究戦略の有効性を問おうとしたものである。

(1) 早坂報告が紹介したように、本パネルは、すべてではないものの、主として19世紀後期から20世紀初頭にかけての林野コモンズのデータを用いた研究である。これらのデータのうち、とくに岩手県内の林野コモンズに関するものは、現在は岩手大学図書館内に「小繋事件文庫」として収蔵されており、小繋事件に関する網羅的な裁判記録のほか、小繋以外の岩手県内の入会裁判記録、岩手県庁に収蔵されている部落有林野関係ならびに入会林野整備関係資料などからなる膨大な資料群である。(2) 林報告は、これら資料群のうち、岩手県庁資料の1911年頃に岩手県知事の命により収集された部落有林野統一関係資料を用いたラージN研究の紹介である。そこでは、130件ほどの林野コモンズのデータをもとに、村々入会と一村入会による入会管理の特徴を整理し、一村入会よりも村々入会において資源不足がより多く発生する傾向があり、また、村々入会において何らかの制限(あるいは制度)が設けられる傾向があることなどを明らかにしている。(3) 吉良報告は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての都府県別パネルデータを用い、森林の所有権が変化した地域、すなわち国有林や公有林が増加した地域では、森林の被覆が増加した一方で森林火災が増加したことなどを明らかにしている。(4) 金澤報告は、戦後の1972年に行われた全国山林原野入会慣行調査データ(N=1440)を用い、潜在クラス分析により、古典的利用タイプ、集落直轄管理タイプ、集落内での権利移動が認められている権利流通タイプ、個人分割タイプの4つのタイプに分けられること、さらに、これら4タイプと人口学的変数との関連についての回帰分析により、人口減少率が低い地域で権利流通タイプを採用する傾向があることなどを明らかにしている。

このように、本パネル中の3つのデータ分析はすべて、既存の統計資料や歴史的資料を用いたものである。そのため、分析対象の入会団体や地域に関して、新たに調査を実施してデータを集めるのは難しい。それゆえ、入手可能なデータと、検証したい仮説や概念との間の適合性の面で問題が生じやすい。しかし、こうした歴史的記録を用いた大規模比較によるコモンズ研究あるいは集合行為研究はこれまでほとんど行われておらず、先駆的な取り組みと思われる。

(2015年分については、林(2016)からの転載)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

林雅秀(2016)2015年国際コモンズ学会エドモントン大会に参加して. 林業経済 69(1):19-21. 査読無.

林雅秀(2015)書評「三俣学編「エコロジーとコモンズ」:環境ガバナンスと地域自立の思想». 林業経済 68(2):19-25. 査読無.

八巻一成(2015)国有林の公益的機能と公共性の現代的意味. 林業経済 68(9):21-22. 査読無.

Yamaki, K. (2015) Network governance of endangered species conservation: a case study of Rebutia 's-Slipper. Journal of Nature Conservation 24: 83-92. 査読有.

三須田善暢・林雅秀・庄司知恵子・高橋正也(2015)土屋喬雄「石神調査ノート」と有賀喜左衛門モノグラフの比較検討. 岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集 17: 119-123. 査読無.

八巻一成・茅野恒秀・藤崎浩幸・林雅秀・比屋根哲・金澤悠介・齋藤朱未・柴崎茂光・高橋正也・辻竜平(2014)過疎地域の地域づくりを支える人的ネットワーク 岩手県葛巻町の事例. 日本森林学会誌 94(4): 221-228. 査読有.

林雅秀・金澤悠介(2014)コモンズ問題の現代的変容:社会的ジレンマ問題をこえて. 理論と方法 29(2): 241-259. 査読有.

[学会発表](計 5 件)

林雅秀, 新制度学派の立場からみた森林管理制度, 林業経済学会研究会 Box38, 2015年12月10日 筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)

林雅秀, 家族経営体の経営行動に影響する要因, 林業経済学会研究会 Box37, 2015年12月4日 筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)

林雅秀・三須田善暢・庄司知恵子, 岩手県二戸郡石神村における名子制度と漆器業・漆器市場, 市場史研究会, 2015年11月12日, 東北大学(宮城県仙台市).

林雅秀, 山菜・キノコ資源利用と部外者入山ルール, 日本民俗学会年會(招待講演), 2014年10月11日, 岩手県立大学(岩手県滝沢村)

Masahide Hayashi, Toshiya Matsuura, Yosuke Kira, Accommodating strangers in the forest commons, 14th Global Conference of the International Association for the Study of the Commons, 2013年6月4日~6月7日, 富士吉田市

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林雅秀 (HAYASHI Masahide)
山形大学・農学部・准教授
研究者番号：30353816

(2) 研究分担者

八巻一成 (YAMAKI Kazushige)
森林総合研究所・北海道支所・グループ長
研究者番号：80353895

(3) 連携研究者

なし